

『太平經鈔』庚部卷之七虛無自然圖道必成戒（第四紙右第十行）第七紙右第五行）

担当 佐々木聡

【原文一】

「請問、人之爲善也、上孝子・上忠臣・上順弟子、當思上何等於（一）君父師哉。」「當上（二）異聞珍寶希見之文而得上者是也。」「忠臣孝子順弟子、常可樂爲也、何不上同聞而上異聞（三）。即（耶）（四）。」「同聞上自有之、何須復上耶。」「愚生不曉其意。」「行、且使子知其審實天下所來所珍、悉未常見而善珍也。以上其君、是上忠臣也。未常見善食、以上其親、是上孝子也。未常見之說、以上其師、是上善（五）弟子也。子知之耶。」「（六）願聞上同事、上之所有、而重上之、何也。然皆應故其上。罪不除。」「何其重也。」「子應不曉之生、人之所常有重、皆厭之。何須復上之耶。（七）自古及今、大聖之定凡事、乃去同取異、乃得天地之心意、此之謂也。」

（一）『太平經』有「其」字。

（二）『太平經』有「其」字。

（三）『太平經』有「邪」字。

（四）『太平經』「即」作「耶」、拋此改。

（五）『太平經』有「順」字。

（六）『太平經』有「唯唯」句。

（七）『太平經』以下有『上人所厭、名爲故其上也。下而故其上、於子意寧當坐不邪。』『愚生已覺矣。』『故得瑞應善物、希見之珍、當上於君父師也。上之所自有、慎無上也。是故』五十六字。

【訓読一】

「請ひて問ふ、人の善を爲すや、上孝子・上忠臣・上順弟子は、當に何等を君・父・師に上せんと思ふべきや。」「當に異聞・珍寶・希見の文を上すべし。而ち上するを得るは是れなり。」「忠臣・孝子・順弟子は、常に爲すを樂ふべきなり。何ぞ同聞を上せずして異聞を上せん。」「即ち同聞は上自ら之有り、何ぞ須く復た上すべけんや。」「愚生 其の意を曉らかにせず。」「行、且に子をして其の審實を知らしめんとす。天下の來たす所 珍とする所は、悉く未だ常て見ずして善く珍とするものなり。以て其の君に上するは、是れ上忠臣なり。未だ常て見ずして善く食するもの、以て其の親に上するは、是れ上孝子なり。未だ常て見ざるの說、以て其の師に上するは、是れ上善の弟子なり。子之を知るや。」「願はくは聞かん、同事を上するに、上の有する所にして重ねて之を上するは、何ぞや。」「然り、皆な應に其の上するを故にすべし。罪は除かれず。」「何ぞ其れ重ぬるや。」「子應に不曉の生なるべし。人の常に有る所、重ぬるは皆な之を厭ふ。何ぞ須く復た之を上すべけんや。古自り今に及ぶに、大聖の凡事を定むるや、乃ち同を去り異を取る。乃ち天地の心意を得るは、此の謂なり。」

【試訳一】

「お尋ね致します、人が善をなすことにおいては、上孝子・上忠臣・上順弟子は、何を君・父・師に献上しようとするべきでしょうか。」「異聞・珍宝・希見の文を献上すべきである。献上し得るものはこれらである。」「忠臣・孝子・順弟子は、常にその行いを願うべきです。どうして同聞（人々がみな耳にするような風聞）を献上せずに異聞を献上するのですか。」「同聞は君上自らそれを見聞きし、持っているものであるから、どうしてまた献上すべきであろうか。」「愚生はその意図を理解できません。」「よろしい、まさになんじにその真意を知らしめよう。天下（の人々）がもたらすものと、珍重するものは、いずれも未だかつて見たことがなくて、よく珍重されるものである。こうしたものをその主君に献上するのは、上忠臣である。未だかつて見たことがなくて美味なもの、こうしたものをその両親に献上するのは、上孝子である。未だかつて見たことがない言説、こうしたものをその師匠に献上するのは、上善の弟子である。なんじはこのことを知っているか。」「お聞かせ願います、同事を献上するときに、君上がすでに見聞きし、持っているものとを重複して献上するのは、どうしてですか。」「そう、みな故意にそのように献上するだろう。（それでは）罪は除かれないのである。」「どうしてそのように重複するのですか*」「なんじはまさに察しの悪い弟子であるな。人は常日頃から重複があれば、だれもがこれを嫌っているのである。どうして重複してそれを献上すべきことがあるのか。古より今に至るまで、偉大な聖人が万事を定めることには、ありふれたものは取り除き、珍しいものを採用した。すなわち天地の心意を得るとは、このような行いのことである。」

*検討会ではこの句を「何ぞ其れ重きや」と訓読し、「どうしてそれほど（罪が）重いのでしょうか」と訳す案も出た。

【注釈一】

○上孝子・上忠臣・上順弟子

『太平經』卷四十七・受七上善臣子弟子爲君父師得仙方訣

「夫上善之臣子民之屬也、其爲行也、常旦夕憂念其君王也。念欲安之心、正爲其疾痛、常樂帝王垂拱而自治也、其民臣莫不象之而孝慈也。其爲政治、但樂使王者安坐而長游、其治乃上得天心、下得地意、中央則使萬民莫不歡喜、無有冤結失職者也。跂行之屬、莫不嚮風而化爲之、無有疫死者、萬物莫不盡得其所。天地和合、三氣俱悅、人君爲之增壽益筭、百姓尚當復爲帝王求奇方殊術、閉藏隱之文莫不爲其出、天下嚮應、皆言咄咄。善哉。未嘗有也。上老到于嬰兒、不知復爲惡、皆持其奇殊之方、奉爲帝王。帝王得之、可以延年。皆惜其君且老、治乃得天心、天地或使神持負藥而告、子之得而服之、終世不知窮時也。是所謂爲上善之臣子民臣之行所致也。」

「上善第一孝子者、念其父母且老去也、獨居閒處念思之、常疾下也、於何得不死之術、嚮可與親往居之、賤財貴道活而已。思弦歌哀曲、以樂其親、風化其意、使入道也。樂得終古與其居、而不知老也。常爲求索殊方、周流遠所也。至誠乃感天、力盡乃已也。其衣食財自足、

不復爲後世置珍寶也。反悉愁苦父母、使其守之、家中先死者、魂神尚不樂愁苦也。食而不求吉福、但言努力自愛於地下可、毋自苦念主者也。是名爲太古上皇最善孝子之行。四方聞其善、莫不遙爲其悅喜、皆樂思象之也。因相倣效、爲帝王生出慈孝之臣也。夫孝子之憂父母也、善臣之憂君也、乃當如此矣。」

「上善之弟子也、受師道德之後、念緣師恩遂得成人。乃得長與賢者相隨、不失行伍。或得官位以報父母、或得深入道、知自養之術也。夫人乃得生爲父母、得成道德於師、得榮尊於君。每獨居一處、念君父師將老、無有可以復之者、常思行爲師得殊方異文、可以報功者。惟念之正心痛也、不得竒異也。念之故行、更學事賢者、屬託其師、爲其言語、或使師上得國家之良輔、今復上長有益帝王之治。若此乃應太古上善之弟子也。」

○同聞

『漢書』卷三十六·楚元王傳

「高宗·成王亦有雉雉拔木之變、能思其故、故高宗有百年之福、成王有復風之報。神明之應、應若景嚮、世所同聞也。」

(參考)『太平經』卷一百八·忠孝上異聞·忠孝上異聞訣第一百七十五

「請問、人之爲善也、上孝子·上忠臣·上順弟子、當思上何等於其君父師哉。」「當上其異聞珍寶希見之文、而得上者是也。」「忠臣·孝子·順弟子、常可樂爲也。何不上同聞而上異聞邪。」「同聞上自有之、何須復上邪。」「愚生不曉其意。」「行且使子知其審實、天下所來所珍、悉未嘗見而善珍者也。以上其君、是上忠臣也。未嘗見善食、以上其親、是上孝子也。未嘗見之說、以上其師、是上善順弟子也。子知之邪。」「唯唯。願聞上同事。上之所有而重上之、何也。然皆應故其上、罪不除。」「何其重也。」「子應不曉之生、人之所常有、重皆厭之。何須復上之邪。上人所厭、名爲故其上也。下而故其上、於子意寧當坐不邪。」「愚生已覺矣。」

「故得瑞應善物、希見之珍、當上於君父師也。上之所自有、慎無上也。是故自古及今、大聖之定凡事也、去同取異、乃得天地之心思、此之謂也。子曉邪。」「善哉善哉。」

【原文二】

「天有兩手、乃(一)成凡事。(二)一手有病邪惡、則無有成事。天大怒之、地以爲忌。天下亂而無成功、一由此一手邪惡而不并力。凡事盡不理、六方不太平、亦由此兩手有病邪惡而不并力。所致吉凶安危、(三)由此兩手。真人亦豈深知之耶。」「不(四)。唯天師開示其要意、使得知之、知之者(則知之。不者)(五)終古冥冥昏亂、無從得知之也。夫師者、乃天地凡事教化之本也。雖難、安得「不」(六)言哉。」「善哉。真人之求問事(七)辭也、其要而言□□而已。」(八)(九)安坐、爲諸真人具說其意。天下象而行之、無復凶亂事。天上諸神召(十)爲兩手筮字爲要記。國家行之則長存。凡人之則久富安(十一)。要道將出、近在凡人身。今爲(十二)真人分別言之。」(十三)「天地者主造出(十四)凡事之兩手也。四時者主傳養凡物之兩手也。(十五)男女夫婦者主傳統天

地陰陽之兩手也。師弟子者主傳相教通^(十六) 凡事文書道德之兩手也。君與臣〔者〕^(十七)、主傳
^(十八) 理凡事人民諸物之兩手也。此有六事、纔舉其綱、見其始耳、不可勝書也。凡事相須而
成事者、皆兩手也。天上名爲重規疊^(十九) 矩皆^(二十) 相應者也。一手邪^(二十一) 不等無成事、天
上名爲大亂之治。六方八遠名爲鰥寡斷嗣、日以向衰。無成事、由此兩手不并力也。」

(一)『太平經』有「常共」兩字。

(二)『太平經』有「其」字。

(三)『太平經』有「一」字。

(四)『太平經』有「及」字。

(五)『太平經』「知之者」作「則知之。不者」、掇此改。

(六)『太平經』有「不」字，掇此改。

(七)『太平經』有「之」字。

(八)『太平經』「其要而言□□而已」作「其言要而言□□」。

(九)『太平經』有「諾」字。

(十)『太平經』「召」作「名」。

(十一)『太平經』「召」作「名」。

(十二)『太平經』有「諸」字。

(十三)『太平經』有「唯唯」兩字。

(十四)『太平經』有「生」字。

(十五)『太平經』有「五行者主傳成凡物相付與之兩手也」句。

(十六)『太平經』有「達」字。

(十七)『太平經』有「者」字，掇此補。

(十八)『太平經』有「治」字。

(十九)『太平經』「疊」作「沓」。

(二十)『太平經』有「當」。

(二十一)『太平經』有「惡」。

【訓読二】

「天に兩手有り、乃ち凡事を成す。一手に邪惡を病むこと有れば、則ち成事有る無し。天大
いに之を怨み、地以て忌と爲す。天下亂れて成功する無きは、一に此の一手 邪惡にして力
を并せざるに由る。凡事盡く理まらず、六方 太平ならざるも、亦た此の兩手 邪惡を病むこ
と有りて力を并せざるに由る。致す所の吉凶安危も、此の兩手に由る。真人も亦た豈に深く
之を知らんや。」「不。唯だ天師のみ其の要意を開示し、知之を知るを得しめば、則ち之を知
る。しからずんば、終古に冥冥として昏亂し、従りて之を知るを得ること無きなり。夫れ師
は、乃ち天地凡事の教化の本なり。難しと雖も、安んぞ言はざるを得んや。」「善きかな。真
人の求めて事を問ふの辭たるや、其れ要にして□□を言ふのみ。安坐せよ、諸真人の爲に具
さに其の意を説かん。天下象りて之を行なはば、復た凶亂の事ある無し。天上の諸神召して

兩手の筈字を爲りて要記を爲す。國家之を行へば則ち長存す。凡人之を行へば則ち久しく富安す。要道將に出でんとするに、近づきて凡人の身に在り。今真人の爲に分別して之を言ふ。」「天地は凡事を造出するを主るの兩手なり。四時は傳へて凡物を養ふを主るの兩手なり。男女夫婦は傳へて天地陰陽を統ぶるを主るの兩手なり。師弟子は傳へて相ひ凡事の文書道德を教通するを主るの兩手なり。君と臣とは、傳へて凡事人民諸物を理むるを主るの兩手なり。此れ六事有り、纔かに其の綱を擧げ、其の始まりを見るのみ、勝げて書くべからざるなり。凡事相ひ須ちて事を成すは、皆な兩手なり。天上名づけて『重規疊矩（規を重ねて矩を疊ぬ）』と爲すは皆な相ひ應ずる者なり。一手邪にして等しからざれば事を成す無し。天上名づけて『大亂の治』と爲す。六方八遠 名づけて『鰥寡 嗣を斷ち、日ごとに以て衰に向かふ』と爲す。事を成す無きは、此の兩手の力を并はせざるに由るなり。」

【試訳二】

「天には兩の手があり、かくして万事を成すのである。一方の手が邪惡を病めば、事が成ることはない。天は大いにこのことを怨み、地はこれにより忌み嫌った。天下が乱れて功績を成すことが無いのは、ひとえにこの一方の手が邪惡となり力を合わせるができないからなのである。万事がみな治まらず、六方（天下）が太平にならないのも、この兩手が邪惡を病んで力を合わせられなかったからである。（天が）下す吉凶や安全・危険なども、この兩手に拠るものである。真人もまたどうして深くこれを知ろうか。」「いいえ。ただ天師のみがその要旨を開示し、このことを知らしめてくださったので、知ったのです。そうでなければ、とこしえに暗闇の中にあつて道理が分からず、天師の開示によりこのことを知りえることはなかったでしょう。いったい（天）師とは、つまり天地における万物教化の根本です。難しいとはいえども、どうして言葉にしないでいられましょうか。」「よきかな。真人の求める問いの答えの言葉は、要約すれば□□を言うのみである。安座せよ、諸真人のために詳しくその意味を説明しようではないか。天下（の人々）が真似してこれを実践すれば、二度と災禍や騒乱がおこることはない。天上の諸神は（我を）召して兩手の筈字を作り、（我がそれに基つき）要記を作った。国家がこれを実践すれば、長く存続する。凡人がこれを実践すれば、久しく富みややすらぐ。要道は今にも出現しようというときには、近づいてきて凡人の身のまわりにあるものである。いま真人のためにそれぞれ分けてこれを述べよう。」（中略）

＊「天地は万事を創出することを掌る兩手である。四時はこれを承けて万物を養うことを掌る兩手である。男女夫婦はこれを承けて天地の陰陽を統括することを掌る兩手である。師と弟子はこれを承けて万事の文書と道德を教えて伝えることを掌る兩手である。君主と臣下はこれを承けて万事・人民・諸物を治めることを掌る兩手である。以上は六事あつて、わずかにその要綱を取り上げ、その始めを見るのみであつて、書きつくすことはできない。万事につき、互いに助けとして事を成就するものは、みな兩手である。天上（の諸神）が『重規疊矩（規矩を重ねる）』と名づけたものはいずれも互いに応じるもの（つまり兩手）である。一方の手が邪惡であり、等しい関係でなくなれば、事を成就することはない。天上（の

諸神）はこれを『大乱の治』と名付けた。六方八遠（の諸神）は『鰥寡が跡継ぎも無く、日毎に衰えていく』と名付けた。事を成就できないのは、この両手の力を合わせざるがためである。」

＊この個所については「天上の諸神召して両手の為に筈字もて要記を爲す。」と訓読し、

「天上の諸神が（我を）召して、この両手について、筈字を用いて要記を作った」と訳す案もでた。注釈に挙げた『太平經』卷之八十八・作來善宅法には、「筈字」の類似表現として「竒方殊策善字」が見え、同じく冒頭の「古今河洛神書善文之屬及賢明口中訣事」などと同じものを指すと考えられるが、その起源は天上より下るものである。また天師がこれにより「洞極之經」を作ったともある。そこで右の文脈も「両手の筈字」は天上の諸神が作り、「要記」は天師が作ったと解釈した。

＊『太平經鈔』の原文はこの通りだが、『太平經』と比較すると、この個所にはさらに問答が差し挟まれているため、中略があることを明記した。

【注釈二】

○病邪惡

『太平經』卷五十三・分別四治法

「言談皆何等事也。在其所疾苦、文失之者爲道質、若質而不通達者爲道文、疾其邪惡者爲道正善也、使其覺悟。今天地至尊自神、神能明、位無上、何故不自除疾病、反傳言於人乎。天地者爲萬物父母、父母雖爲善、其子作邪、居其中央、主爲其惡逆、其政治上下、逆之亂之、父母雖善、猶爲惡家也。比若子惡亂其父、臣惡亂其君、弟子惡亂其師、妻惡亂其夫、如此則更相賊傷大亂、無以見其善也。天地人民萬物、本共治一事、善則俱樂、凶則俱苦、故同憂也。嚮使不共事、不肯更迭相憂也。是故天地欲善而平者。必使神眞聖人爲其傳言、出其神文、以相告語、比若帝王治欲樂善、則有善教、今此之謂也。」

○筈字

『太平經』卷之八十八・作來善宅法

「今天師言乃都合古今河洛神書善文之屬及賢明口中訣事、以爲洞極之經。乃後天地開闢以來灾悉可除也。帝王長遊樂垂拱無憂也。言一事不足備、輒有餘灾。故當都合之。今不知當以何來致此竒方殊策善字、廼悉得之。」「善哉善哉。諸真人思念劇也。天神已下、告諸真人矣。上皇之氣來、祐助道德之君口口矣。行、真人今乃爲皇靈天具問事。吾職當爲天下具談。何敢有懈焉。諾。諸真人安坐、方爲真人悉說之。」

○六方八遠

『太平經鈔』辛部卷之八

「世衰乃更爲大興、天下仰命、莫不得其天地六方八遠絕洞、陰陽俱悅、天病風雨爲時、雷電不作、日月更明、三光不失度、四時五行順行、各得其所、此神聖善言所致也。其功莫不大

哉。」

『太平經鈔』丙部卷三

「夫天地六方八極大諫、俱欲正河洛文出矣。天明證天下瑞應書見、以諫正君王。天下莫不響應、諫而不從因而消亡矣。」

（參考）張理『周易圖』卷下・參天兩地圖

「耿南仲曰、參天則天一天三天五總而爲九、兩地則地二地四合而爲六方、其揲著七九八六、皆以爲用、及其成卦舍七而取九、舍八而取六、倚於一偏是爲倚數。」

【原文三】

「（一）請問天上何故（二）名（三）爲兩手。」（四）兩手者、言其齊同并力、無前（五）却、然後（六）可成也。兩手不并力者事不可成也。故凡事（七）象此兩手、皆當各得其人、并力同心。象此兩手、乃告（八）安太平之氣立至（九）。不象此兩手（十）、億（十一）萬年不能出上皇太平氣也。太平氣常欲出、若天常「欲」（十二）若（十三）兩手、久不調御之、故使閉不得通、出（十四）悒悒何訾、咎在兩手不調。若兩手平調者、（十五）上皇太平氣出、前後至不相須。」「善哉（十六）。」是故天地不并力、萬物（十七）無從（十八）出。四時不并力、凡物無從得長。五行不并力、凡物無從得成。君臣不并力、凡事無從得理。夫婦不并力、子孫無從得長、家道無從得立。師弟子不并力、凡結事無緣得解、道德無緣（十九）得興、矇霧無從得通、六方八遠大化無從得行。是故皆當并力、比若兩手、乃可通也。不若兩手故（二十）致凶也。雖治療（二十一）、無益也。（二十二）無從得成功也。但空久愁苦而日凶（二十三）。故凡象此兩手者選舉當得其人。不得其人者、天上諸神、名爲『半死不持、一手獨作。』安有能成功成事哉。（二十四）凡疑事宜深思此意以赤心。

（一）『太平經』有「善哉善哉」四字。

（二）『太平經』有「正」字。

（三）『太平經』有「此」字。

（四）『太平經』有「善乎。子之問也、得其意。」三句。

（五）『太平經』有「無」字。

（六）『太平經』「然後」作「乃後事」。

（七）『太平經』有「者」字。

（八）『太平經』「告」作「吉」。

（九）『太平經』有「也」字。

（十）『太平經』有「者」字。

（十一）『太平經』「億」作「億億」。

（十二）『太平經』有「欲」字，拋此補。

（十三）『太平經』「若」作「由此」。

（十四）『太平經』有「治」字。

（十五）『太平經』有「此」字。

- (十六)『太平經』「善哉」作「善哉善哉」。
(十七)『太平經』有「凡事」兩字。
(十八)『太平經』有「得」字。
(十九)『太平經』「緣」作「從」。
(二十)『太平經』有「日」字。
(二十一)『太平經』有「之」字。
(二十二)『太平經』有「猶」字。
(二十三)『太平經』「日凶」作「日日凶凶」
(二十四)『太平經』有「真人爲天來遠問」句。

【訓読三】

「請ひて問ふ、天上何故に名づけて兩手と爲すや。」「兩手は、言ふところは其の齊ひと同しく力を并はせ、前却すること無し。然る後に成るべきにして、兩手もて力を并せざる者は事成るべからざるなり。故に凡事此の兩手を象らんとすれば、皆な當に各おの其の人を得、力を并せて心を同くすべし。此の兩手を象れば、乃ち告安太平の氣立ちどころに至る。此の兩手を象らざれば、億萬年にして上皇太平の氣を出す能はざるなり。太平の氣常に出でんと欲し、若しくは天常に兩手の若くせんと欲するも、久しく之を調御せず、故に閉ちて通ずるを得ず、出づること悞悞として何をか訾なげかん。咎めは兩手の不調に在り、若し兩手平調なれば、上皇太平の氣出づるも、前後して至れば相ひ須なたず。」「善きかな。」「是れが故に天地力を并せざれば、萬物従りて出づること無し。四時力を并せざれば、凡物従りて長ずるを得ること無し。五行力を并せざれば、凡物従りて成るを得ること無し。君臣力を并せざれば、凡事従りて理むるを得ること無し。夫婦力を并せざれば、子孫従りて長ずるを得ること無く、家道従りて立つるを得ること無し。師弟子力を并せざれば、凡結事縁りて解するを得ること無く、道德縁りて興おこるを得ること無く、朦霧従りて通ずるを得ること無く、六方八遠の大化従りて行はるを得ること無し。是れが故に皆な當に力を并はせ、比ぶるに兩手の若くすべし。乃ち通ずべきなり。兩手の若くせざるが故に凶を致すなり。治療すると雖も、無益なり。従りて成功を得ること無きなり。但だ空しく久しく愁苦して日ごと凶あり。故に凡そ此の兩手を象る者選舉して當に其の人を得るべし。其の人を得ずんば、天上の諸神、名づけて『半死にして持たず、一手にして獨り作す』と爲す。安んぞ能く成功して成事すること有らんや。凡そ事を疑ふは宜しく深く此の意を思ふに赤心を以てすべし。

【試訳三】

「お尋ね致します、天上（の諸神）は何故両手と名付けたのですか。」「両手とは、その等しく力を合わせて、進退することなく足並みをそろえることを言ったのである。このようにして事を成就すべきなのであって、両手でもって力を合わせない者は事を成就できないので

ある。故に万事につき、この両手を真似ようとすれば、みな各々その（相応しい）人を得て力を合わせ、心を同じくすべきである。この両手をまねれば、そこで安樂を告げる太平の氣がたちどころにやってくる。この両手をまねなければ、億万年たっても上皇太平の氣を出だすことはできない。太平の氣は常に出でようとしており、あるいは天が常に両手のようにしようとしているが、久しくこれを調整制御していないので、閉塞してしまつて通ずることができない。出口が鬱鬱と塞がるほど何を嘆こうというのか。（天の）咎めは両手の不調に在つて、もし両手が平常通りの調子であれば、上皇太平の氣が出ても、前後して至れば、互いに助け合うことはできない。」「その通りです。」「このために天地が力を合わせなければ、万物がこれにより出でることではない。四時が力を合わせなければ、万物がこれにより成長することはできない。五行が力を合わせなければ、万物がこれにより完成することはない。君臣が力を合わせなければ、万事がこれにより治まることではない。夫婦が力を合わせなければ、子孫がこれにより成長することはない。家の道もこれにより立てることではない。師弟が力を合わせなければ、全ての交わり事が解けることではなく、道徳はこれにより盛んになることではなく、矇霧はこれにより見通せるようになることではなく、六方八遠の大いなる教化はこれにより行われることではない。これ故にみな力を合わせて両手のごとくすべきである。そこで通達することができるのである。両手のようにしないから、凶事を来すことになる。（それは病氣のように）治療しても無益である。これによつて成功を得ることはない。ただいたずらに長く憂い苦しんで、毎日凶事がおこる。故にすべてのこの両手をまねる者は、選挙をすることでの（相応しい）人を得るべきである。その人を得なければ、天上の諸神はこれを『半死にして維持できず、一方の手だけで独り従事する』と名付けた。どうして成功して事を成就することができようか。およそ事を疑うときは宜しくこの主旨を純粹な心でもつて深く考えるべきである。』

【注釈三】

○太平之氣

『太平經』卷五十四・使能無爭訟法

「天地之間、常悉使非其能、強作其所不及、而難其所不能、時觀於其不能爲、不能言、不憐而教之、反就責之、使其冤結、多忿爭訟、民愁苦困窮。即仰而呼皇天、誠冤誠冤、氣感動六方、故致災變紛紛、畜積非一、不可卒除、爲害甚甚、是即失天下之人心意矣。終反無成功、變怪不絕、太平之氣何從得來哉。故不能致太平也。」